# 論文審査の結果の要旨

氏名：八　馬　朱　代

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

論文題名：石清水八幡宮の成立・展開からみた平安時代の神祇祭祀の研究

審査委員：（主査）　日本大学教授　博士（文学）　中　村　順　昭

（副査）　日本大学教授　関　幸　彦

（副査）　日本大学大学院文学研究科非常勤講師　鈴　木　國　弘

本論文は、平安時代の朝廷による神社祭祀の変遷について、石清水八幡宮を中心に考察した研究である。石清水八幡宮は、9 世紀の清和天皇の時期に豊後国の宇佐八幡宮から平安京の近くの男山の地に八幡神を勧請したのに始まり、神社としては新興の存在だが、平安時代を通じて大きく発展して伊勢神宮に次ぐような位置づけとなる。その石清水八幡宮の展開を、おもに天皇の祭祀という面から追究し、政治・社会状況のなかに位置づけることを課題に設定している。

第 1 章では、石清水八幡宮の創建とその背景について考察している。石清水八幡宮には二種類の縁起が残っていて、その内容には差違があるが、その違いについて丹念に分析することで石清水八幡宮の創建期の状況を復元して、清和天皇の即位にあたり、外祖父の藤原良房が天皇の守護を祈願して八幡神を勧請したこと、その際に僧行教が中心となって活動したことを明らかにしている。その後の新羅船侵入事件では、従来から宇佐八幡宮に対外戦争の戦勝祈願を行っていたのと同様に石清水八幡宮が奉幣の対象とされ、さらに天慶の乱での内乱平定を祈願する対象として石清水八幡宮が重視されたことを指摘し、藤原忠平らによって、先例として藤原良房と清和天皇による祈願が重んじられるようになったことを論じている。

第 2 章では、9～10 世紀の自然災害と関連して八幡神に対する信仰が深まったことを論じている。斉衡 2 年（855）の地震によって東大寺大仏の頭部が落下し、その修復に際して宇佐八幡宮に勅使が派遣されて祈願が行われたが、これが聖武天皇の時の大仏創建に宇佐の八幡神が入京して協力したことを再現したもので、それが石清水への勧請の前提となったこと、石清水八幡宮成立後にも地震などの自然災害に対して国家鎮護の神として八幡神が重んじられ、皇位継承に関わることともあわせて天皇を守護する神として展開していったことを論じている。

第 3 章では、天慶元年（938）の八幡新宮破却事件と天慶 8 年の志多羅神入京事件を中心に、石清水八幡宮の発展を考察している。八幡新宮は平安京の東の粟田口で境界の神として民衆に信仰されていたが、放生会の開催をめぐって石清水八幡宮と対立して破却され、新宮とその信仰集団を石清水八幡宮が吸収し、さらに御霊神の一つとして民衆の信仰を集めていた志多羅神を迎え入れて吸収して、石清水八幡宮が平安京の境界を守る神として、国家や天皇の守護神としての性格を強めていったことを指摘している。

第 4 章では、前章までの考察を踏まえて、八幡神の主要な性格として、①内乱平定の神、②対新羅の神、③皇位継承・守護の神の三者があり、9～10 世紀に石清水八幡宮は①②の性格で信仰を集めて発展したこと、③の性格は、宇佐八幡神託事件を出発点とし、9 世紀の薬子の変を契機に再び浮上して以後は皇位継承の都度に宇佐使が派遣されたことを確認し、10 世紀後半の円融天皇の時に③の性格が著しく高まったことを論じる。円融以後の歴代天皇はほぼ恒例の行事として石清水・賀茂・平野などの各神社に行幸を行ったが、最初に行う神社行幸は石清水とするのが例であったことに着目して、円融天皇の石清水行幸が皇子誕生を祈って行われ、その行幸の直後に皇子が誕生したことが大きな要

因であったこと、春日社行幸を求める藤原兼家と石清水を重視する円融天皇とで確執が存在したこと、また石清水臨時祭と石清水放生会が円融天皇の時に整備されたことなどを明らかにしている。

第 5 章では、一条天皇以降の各天皇の石清水行幸について検討して、石清水行幸が恒例化する過程を考察している。一条天皇と後一条天皇は複数回の石清水行幸を行ったが、それぞれの行幸は疫病流行に対する平癒祈願、皇子誕生祈願、平忠常の乱の平定祈願など、特定の目的をもっていたこと、その目的のなかで皇子誕生祈願が大きなものになっていったことを論じている。それとともに行幸の対象となる神社が、石清水・賀茂・平野に加え、藤原氏と関係の深い春日・大原野社などが加えられていったことを論じている。皇子誕生祈願は天皇・皇太子の外戚を目指す藤原氏により行われただけでなく、天皇にとっても自身の子孫に皇統を継がせることが大きな関心事であったことを論じている。

第 6 章では、天皇の生母である東三条院詮子、上東門院彰子の石清水行啓について考察している。この両者の行啓では、石清水八幡宮に続けて住吉社にも行啓していることに着目し、住吉社が神功皇后の「三韓征伐伝承」と深く関わり、この時期に高麗との緊張関係が強まっていたいたことが背景にあることを指摘している。対外戦争の神としての性格は八幡神も持っており、石清水と住吉が組み合わせは後代にも続くことになるが、対外関係の祈願が天皇ではなく女院によって行われていることの指摘は注目される。

第 7 章は、白河天皇（上皇）の石清水行幸について検討し、白河天皇は在位中ほぼ毎年、石清水と賀茂社に行幸を繰り返したが、それは皇子誕生だけでなく皇子の安泰、自身の系統による皇位継承を祈ったものであったことを論じ、また白河の時期に石清水八幡宮を天皇家の宗廟とする表現があらわれはじめ、石清水八幡宮を伊勢神宮と並ぶ特別な神社として認識されるようになったことを明らかにしている。

平安時代の神祇祭祀については、律令制による神祇官が全国の神社の掌握して班幣を行う官社制度が衰退し、京とその周辺の特定の神社に奉幣する形に移行し、祭祀も神祇令に規定する定例の祭祀の他に天皇が行う種々の祭祀が行われるようになることは従来から多くの研究があるが、本論文は、その変化を石清水八幡宮に着目することによって、鮮明に浮かび上がらせている。本論文で示された石清水八幡宮の発展における画期とその背景に関する分析は、神祇祭祀全般にも有効であり、平安時代の祭祀に関する貴重な成果といえる。

八幡神は 8 世紀から大仏造営への協力、道鏡の宇佐八幡神託事件で皇位継承に関わるなど独特な性格を持っていたが、それが石清水八幡宮の成立・展開にも結びついていたことを明らかにし、従来の研究ではあまり明瞭でなかった石清水八幡宮の発展過程を詳細に明らかにしたことは、本論文の大きな成果である。また、天皇と藤原氏とで神社行幸をめぐる意向の違いの指摘や、対外関係に対する祈願を女院が行っていたことの指摘などは、平安時代の政治史を藤原摂関家を中心に論じられてきた平安時代政治史に一石を投じるもので、本論文の成果は学界に寄与するところが大きいと考えられる。

以上の理由から、本論文は博士（文学）の学位に値するものと認められる。

以上

平 成　　年　　月　　日